

管楽器や打楽器を効果的に活用した音楽の授業の提案

愛知県大府市立大東小学校

教諭 市江真理子

1 はじめに

さまざまなジャンルの音楽を手軽に聴くことができる現代において、子どもたちは、自分の興味・関心に合った音楽を自ら選んで触れることができる。しかし、デジタル音楽に関わるが増えた半面、生の楽器の音色のよさや、音楽を通した人と人との関わりのよさを味わう機会は減ってきていると感じる。そこで、生の楽器の音色に実際に触れながら仲間とともに音楽活動をすることによってそれらを味わわせることができると考え、「管楽器や打楽器を効果的に活用した音楽の授業」を提案する。

2 授業実践の視点

音楽を通した人と人との関わりのよさ、音楽のそのもののよさを味わわせるために、以下の視点を意識した授業実践を行った。

① アウトリーチ事業

子どもがプロの演奏を間近で聴き、演奏者の息づかいや表情等を感じ取りながら、音の振動を体全体で体感することで、音楽のすばらしさを味わわせる。

② 鑑賞活動での活用

I C T機器を活用するだけでなく、実際の楽器そのものの音色を体感させることで、その魅力に気付かせ、より深く聴く楽しさを味わわせる。

③ 音楽づくりでの活用

情景や物語のイメージに合った音や音楽を、さまざまな楽器を活用して創作させることで、仲間とともに自分たちの音楽をつくり上げる喜びを味わわせる。

また、授業の最初に本物の音楽と出会わせることで「この曲を演奏してみたい」「もっと聴いてみたい」「友達と合わせてみたい」という思いをもたせるようにした。

3 授業実践

授業者：東海市立三ツ池小学校 大録佳澄

(1) 題材名

音の重なりとひびき

(2) 題材を構想する上での留意点

楽器の音色や音が重なる響きに関心をもち、響き合いを生かして表現する学習に主体的に取り組もうとする姿勢を大切にする。また、間近で外部講師による演奏を聴き、管楽器アンサンブルの楽しさを感じ取ることができるようにする。曲のアレンジを話し合う際に、「～のような、～の感じ」と表現したいことを言葉で仲間や外部講師に伝えることができるように、普段の授業から「表現言葉」を使って発表できるようにしていく。

(3) 題材の目標

- ・音が重なる響きに関心を持ち、響き合いを生かして表現する学習に主体的に取り組もうとする。
- ・音が重なる響きや調による曲想の変化を聴き取り、そのよさや美しさを感じ取りながら表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつことができる。
- ・リズム、速度、強弱、音の重なりなどの要素に気を付け、曲想を生かした表現で演奏することができる。
- ・旋律の繰り返しや速度の変化に気付き、曲全体の構成を理解して聴くことができる。

(4) 指導内容

創作 鑑賞

【共通事項】音の重なり、速度、強弱、リズム

(5) 学習の計画

	学 習 内 容		管楽器との関連
第1次 【つかむ】	「マルセリーノの歌」をいろいろな表現で合奏する		
	第1時	① マルセリーノの歌を合奏する。 ② 演奏表現の工夫をする。	○ 伴奏や低音パートの音色や特色を理解させる。 ○ 音楽の縦と横の関係性について感じ取らせる。
	第2時	① クラスでアレンジしたマルセリーノの歌を演奏する。 ② 実際に演奏してみた感想を話し合う。	○ 1つの曲にみんなで心を合わせて演奏する楽しさを感じ取らせる。 ○ 友達の出す音色を意識させる。 ○ 既習の管・打楽器について想起させる。
<p>ねらう児童の姿</p> <p>楽器の組み合わせや、音の重なり、速度、強弱、リズムの変化を感じ取り、表現の工夫への意欲を高めている。</p>			
第2次 【つくる】	「マルセリーノの歌」の旋律で4つの画像のイメージソングをつくる		
	第3時	① 4つの画像グループに分かれる。 ② 4枚の画像のイメージソング（基本形）を聴く。 ③ 音源に合わせて練習する。 ④ 楽器について調べる。	○ 楽器の音のすばらしさを感じ取らせるため、電子音によるなるべく平坦な表現にとどめたものを聴かせる。 ○ 演奏する管楽器について知る。 ○ 金管クラブの児童が各グループに入るように配慮する。 ○ 高音に華やかな音色をもつ楽器と低音に深みのある音色をもつ楽器を取り上げていく。

	第4時 (本時)	① 講師と基本のイメージソングを演奏する。 ② 講師を交えてグループで基本の楽譜を使い、さらに表現の工夫をしていく。 ③ 講師と一緒に工夫して練習を繰り返しながら曲を完成させる。 ④ グループ発表をする。	○グループごとに講師（管楽器・打楽器奏者）と演奏する。 ○講師に音を実際に出してもらいながら創作する。 ○楽器の特色にあったアレンジのアドバイスをいただく。 ○それぞれのグループの聴くポイントを提示させる。
<p>ねらう児童の姿 講師と一緒に演奏しながら、生き生きと創作活動をしている。</p>			
第3次 【聴く】	題材のまとめと「ハンガリー舞曲第5番」を鑑賞する		
	第5時	① 前時の発表の映像を見る。 ② 「ハンガリー舞曲第5番」を鑑賞する。	○作曲者の思いや意図を表現方法の工夫から探らせる。
<p>ねらう児童の姿 第2次で学習して感じ取ったことを基に、楽器の音色を聴き取ったり曲想の変化を捉えたりしながら、曲全体の構成を理解して鑑賞することができる。</p>			

(6) 本時の学習指導

○目標

- 4種類の画像のイメージソングを、リズム、速度、強弱、音の重なりなどの要素に気を付けながら、どのように演奏するのか思いや意図をもつことができる。
- 外部講師とアンサンブルの楽しさを味わいながら、曲想を生かした表現で演奏することができる。

○準備・資料

教師……4枚の画像、基本のイメージソング楽譜（ホワイトボード）、記号カード、楽器カード

児童……教科書、リコーダー、基本のイメージソング楽譜

○学習過程

段階	学 習 活 動	時 間	指 導 上 の 留 意 事 項
つ な ぐ	<p>1 基本のイメージソングを合奏し、本時の活動を知る。</p> <p>(1) 講師とイメージソングを合奏する。</p> <p>(2) 感じたことをグループ内で発表をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・迫力が違うな ・おもしろい音色だな ・演奏にびっくりした ・金管楽器と木管楽器の音色が違う 	10	<ul style="list-style-type: none"> ○1分間の音出しタイムをとる。 ○講師と児童の交流を図らせる。
	15	<ul style="list-style-type: none"> ○前時までの学習内容の振り返りとして、児童から挙げられた、各画像に対する表現言葉を、画像に貼り付けておく。 ○画像の貼られた譜面台を、グループの看板として用意する。 ○講師の楽器を観察できるようにする。 ○グループ内で、演奏後の感想をお互いに発表させる。 	
つ な が る	<p>2 本時の学習課題をつかむ。</p>		
	<p>音の重なり、速度、強弱、リズムを工夫して楽しくイメージソングを響き合わせよう。</p> <p>3 創作活動をする。</p> <p>(1) 活動の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・創作活動の手順を理解する。 <p>① ホワイトボード楽譜にカードを使って創作タイム（5分）</p> <p>② 音を出しながら相談・練習タイム（10分）</p> <p>③ 発表（各グループ3分）</p>	20	<ul style="list-style-type: none"> ○金管クラブの児童も管楽器演奏で参加させる。 ○各グループにつき1つ（音の重なり、速度、強弱、リズム）の「音楽の要素」で創作させる。 ○創作手順を示す。 ○グループリーダーに音楽記号カード付きホワイトボードを渡す。 ○音の重なりを工夫するグループについては、準備しておいた打楽器の中から使う楽器を選ばせる。 ○速度を工夫するグループには、メトロノームを渡す。

つ な が る	(2) 講師と一緒に、基本の楽譜に表現で工夫することを加えていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・強弱記号をつけてみよう ・リズムを変えてみよう ・こんな表現ができるんだ ・近くで楽器の音色を聴くと迫力がある ・奏法を観察する ・工夫した点を試しに演奏しながら創作する ・工夫した点を発表できるように自分の楽譜にメモする 	30	<ul style="list-style-type: none"> ○グループごとに、ホワイトボードの楽譜にカード（記号や楽器）を貼り付けながら、創作させる。 ○話し合う際に必要な音は、キーボードで演奏しながら創作させる。 ○実際に音に出して試し、気付いた点は変更していくよう声がけする。 ○いろいろな音が混在してしまうので、音出しの時間を区切る。 <p>評楽器の音色や重なる響きを感じ取りながら、音楽の要素を生かして表現を工夫している。</p> <p>(活動の様子・楽譜・発言)</p>
	(3) 発表に向けて、アンサンブルを楽しみながら練習する。 <ul style="list-style-type: none"> ・音の重なりを感じ取りながら、よく聴き合って演奏する。 ・イメージした音色がするかな ・発表するのが楽しみだな ・グループのアピールポイントを1つ、話し合ってみよう。 	33	<ul style="list-style-type: none"> ○各パートの音量のバランスにも気を付けさせる。 ○グループで工夫したところを意識させながら、講師と楽しく練習させる。 ○教師が、基本のイメージソングからの変更箇所を、別グループ担当の講師に伝える。
つ な げ る	4 グループ発表をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・聴いてほしいところを発表する。 ・グループで思い描いた音楽が実際にはどんなふうになるのかな ・自分たちの表現の工夫が伝わるといいな 	45	<ul style="list-style-type: none"> ○1グループ3分で発表する。 ○グループごとの工夫が書かれている楽譜を映し出して、共有させる。 <p>評音の重なりを感じ取りながら、曲想を生かした表現で合奏している。(発表)</p>

○本時の評価規準

- 音が重なる響きを聴き取り、よさや美しさを感じ取りながら音楽の要素を生かした表現を工夫し、どのように演奏するかについて自分なりの思いや意図をもっている。

(活動の様子・楽譜・発言)

- 互いのパートを聴き合い、工夫したことを生かして「マルセリーノの歌」を演奏している。

(発表)

(7) 授業の実際

基本のイメージソングを合奏し本時の活動を知る活動では、講師とともに演奏することによって、「演奏に迫力が出了」「楽器の音がよく聴こえて気持ちよかった」などの感想が伝えられていた。演奏の後に課題をつかんだことにより、自分たちの演奏をよりよいものに工夫しているという意欲につながっていた。創作活動では、ホワイトボードの楽譜に記号や楽器のカードを貼り付けながら、グループの友達や講師と話し合いながら、イメージに合うようにするためにはどうしたらよいかを考えていた。実際に音を出して試しながら演奏の仕方を工夫していたが、音の出し方や拍の取り方については、講師のアドバイスが効果的に働いていた。限られた時間の中で、全てのグループがイメージに合った工夫を決めて合奏することができるようになった。グループ発表では、それぞれのグループの演奏が工夫する前の演奏から変化したことによって聴いている児童が気付き、演奏後には大きな拍手があがった。また、演奏した児童は満足した表情をし、「イメージに合った演奏ができてうれしい」などの感想が聞かれた。



【講師を交えてグループで話し合う様子】



【工夫した演奏の発表】

4 成果と課題

間近で外部講師と一緒に演奏することによって、それぞれの楽器のもつ音色の特徴を感じ取り、音楽のすばらしさを味わうことができた。グループで統一したイメージをもち、与えられたキーワードを手掛かりにしながら演奏の仕方を工夫していくことで、人と人との関わりの中で音楽をつくり上げていく喜びを感じ取ることができた。また、授業の最初に外部講師による演奏を聴くことにより、表現豊かに演奏したいという意欲をもって本活動に入ることができ、単元を通してその意欲を保つことができた。このように、外部講師とともに活動することはさまざまな面において大変効果的であるが、通常の授業の中で場の設定をすることについては課題が残る。

5 おわりに

本物の音に触れることのできる場を設定することで、子どもたちが楽器や楽曲のよさを実感できる。デジタルのよさ、アナログのよさ、音楽にもそれぞれのよさがあるが、体験してみないと比べようもなく実感することも難しい。教育に携わる者が意識してその機会を与えることで、子どもたちの感性が磨かれると信じて、今後の指導の在り方を考えていきたい。

みんなで楽しく音を奏でよう ～小規模学校における全校合唱奏への取り組み～

愛知県田原市立東部中学校

教諭 内藤 利江子

(H29 田原市立亀山小学校 在)

1 はじめに

亀山小学校は、愛知県にある渥美半島の最西端に位置しており、周りをキャベツ畑に囲まれた自然豊かな学校である。全校児童は53名で、田原市の中で最も児童数が少ない。そのため、休み時間になると他学年の児童と一緒に遊んだり、全校児童と一緒に遊んだりすることがある。また、行事などで交流することも多く、全員がお互いを知っている環境である。

部活動は、音楽部・運動部があるが、どちらにも4～6年生児童全員が参加している。そのため、普段は両方の部活を時間で区切って活動しているため、各部活の練習時間は少ない。しかし、どの子どもも意欲的に活動している。

2 全校合唱奏への取り組み

全校合唱奏を取り組むにあたり、2つのことを意識した。1つ目は、全校児童が一緒になって1つの曲を演奏することで、小規模校のよさが発揮でき、子どもたちにとってよい経験になることである。2つ目は、低学年に発展的な発表の場を提供できることである。1年生の身体活動、2年生の鍵盤ハーモニカ、3年生のリコーダーの学習を、多くの人に見てもらえる場を設けることは、子どもたちの意欲の向上につながると考えている。

活動にあたり、全校合唱奏のパートを、音楽部である4～6年生(26名)は金管バンド、3年生(15名)はリコーダー、2年生(7名)は鍵盤ハーモニカ、1年生(5名)はダンスやパーカッション、鍵盤ハーモニカを担当することにした。

3 活動の実際

(1) 音楽部(金管バンド)の活動

4月から顧問が変わったこともあり、音楽部として、息の吐き方、B durの音階、ハーモニーを中心に基礎練習を行った。始めは顧問と子どもたちの足並みがそろわず、空回りすることも多かった。しかし、練習が軌道に乗りだすと、少しずつ音色に変化がでてきた。以前に比べると澄んだ音が響くようになり、ハーモニーにもあつみがでてきた。

運動部のみの練習期間が終わり、9月に行われる運動会の曲の練習になると、6年生が中心となり、音取りやパート練習を行った。夏休みには、ドリルの練習が加わり、動きながら吹くことを少しずつできるようにしていった。一方で、6年生にはファンファーレを8名全員(ドラムメジャーを含む)で行うことを伝え、少ない人数でもより遠くに音が響き渡るように練習していった。

運動会が終わると、次は音楽会に向け練習が始まった。短い練習時間のため、計画をたて、いつまでにどこまでの演奏ができるようにしなければいけないのかを掲示し、子どもたちの自主性を促した。希望者にはパート音源を配付したり、楽器を持ち帰って練習することを許可したりした。6年生を中心に積極的に練習に取り組み、メロディーもどンドン吹けるようになっていった。

(2) 低学年(1、2、3年)との連携

音楽部で指導する高学年とは違い、低学年は音楽の授業の中で担任が指導した。そのため、音楽主任との連絡を密にとるようにした。幸い、音楽部顧問の中に低学年の担任がいたため、低学年指導のリーダーを任せ、練習に取り組んだ。まずは、音楽部で提示した計画に合わせ、低学年でも「いつまでに、どこまで演奏できるようにするのか」を確認した。そして、各学年で練習をした後、低学年の合同音楽の時間を設け、高学年との合奏の前に、自分たちで合わせるようにした。そうすることで、低学年の子どもたちの不安が減り、スムーズに全校練習を行うことができた。また、低学年の合同音楽で課題や疑問が挙がることで、全校練習の前に顧問同士で話し合うことができたのもよかったといえる。

(3) 外部講師との連携

外部講師を依頼することで、児童や教職員の技能や指導力を高めたいと考えた。そこで、普段学校へ出入している楽器店の担当者にも協力を頂いた。

年間を通して、5名の講師の先生にご指導頂いた。4月に基礎練習の講師として、4年生を中心に指導して頂いた。床に仰向けに寝転び、腹式呼吸の仕方を学んでいくことで、少しずつ息の使い方を意識するようになった。また、ハーモニー練習の楽譜を作成してもらい、小学生でも音を重ねる意識をもてるようにしてもらった。2人目の講師の先生には、定期的に金管および全校合奏の指導をしていただいた。音の強弱の意識の仕方やリズムの取り方など基本的なことから、合奏での音のまとめ方まで全体を通して教えて頂いた。パーカッションの講師の先生には、拍のとり方や叩き方を中心に指導してもらった。他にも、パフォーマンスや歌唱指導の先生方には、短い時間だったが、子どもたちの演奏が映えるようにしてもらったり、響きのある歌声になるように指導してもらったりした。

そして、編曲者の先生にもお忙しい中来校してもらい、話し合いながら納得する曲に仕上げていった。曲のコンセプトとして、学年ごと主役の場があること、最後の演奏会となる6年生の活躍の場を増やすことを挙げたことで、全体の技能が高まっていった。

(4) 全校練習を通して

3学期に入ると、週に1時間全校による合同音楽の時間を設けた。体育館に舞台の大きさやひな壇の位置をラインテープで引き、位置を確認しながら練習した。高学年は低学年に見られている意識をもつことで、いつも以上に頑張り、低学年は高学年の演奏を聴きながら、楽しく合奏できるようになった。6年生は、最初のアカペラや他学年が歌唱している時の伴奏といったように、他の学年よりも負担が大きかったが、「さすが6年生」と言われるような演奏ができるようになっていった。



教員としては、「演奏を通す」「ダンスはできなくてもよいから、移動の動きはできるようにしておく」「全てをきちんと通す」といったようにその日の練習目標を予め提示し、共通意識をもち練習にのぞんだ。そのため、無駄を省き、より集中して練習することができた。

(5) 発表の様子

2月初め、田原市で行われた音楽会に出演した。全校で参加することが保護者や地域の方への宣伝となり、家族全員で聴きにきたり、子どもや孫が亀山小学校にいなくても足を運んでくださったりした地域の方もいた。子どもたちは緊張する中、一生懸命演奏することができた。その1週間後、「全国小学校管楽器合奏フェスティバル 東海北陸大会」に出演した。田原市よりも大きい舞台に最初は子どもたちも戸惑っていたが、音楽会よりも伸びやかに演奏することができた。子どもたちも「上手にできたね」と言い合い、満足した様子だった。



4 終わりに

1年の活動を通して、学年を越えた活動をすることで、子どもたちの成長が見られた。全校合唱奏では、小規模校のよさをアピールしたり、低学年の音楽の発表の場にしたりすることができた。また、ともに音楽することで、低学年の子どもたちの音に対する感覚がよくなっていった。これは全校練習などで高学年の歌声や楽器の音色を聴いていることが要因だと考えられた。

時間数の問題や教職員の共通意識など、課題はたくさんある。しかし、子どもたちの生き生きとした表情は、音楽のすばらしさを実感しているからこそではないだろうか。これからも全校合唱奏を通して、本校の児童・教職員が生涯に渡り、音楽する喜びを感じ取り、みんなで楽しみながら音を奏でる気持ちをもち続けていけることを願っている。